

「こんな」 しています。

わだいのじかん

モウソシ地

今年の夏も中国内モンゴルの毛烏素(モウソ)シ地で調査を行いました。

沙地とは、元々緑豊かな草原だったが、人間の過剰な土地利用により砂漠化した土地のこと。砂漠化は土地を不毛にします。

たとえば、超高級繊維のカシミア。カシミアヤギの少量の産毛で編まれるため生産量が少なく庶民には高嶺の花でしたが、最近はその価格で豊富に出回っています。内モンゴルはカシミアの

産地。日本にも多く輸出され人気です。多産による安価なカシミアセーターの背景に、ヤギの過放牧による中国の砂漠化の進行があることは行き過ぎた消費経済と環境の

関係をよく示しています。増やしたヤギの食欲に草の芽吹きが追いつかなくなり、ついには草原が失われるのです。砂漠化による細かい砂は黄砂となり、北京や日本にまで飛来し問題になっています。砂漠化防止のための緑化は世界の重要なテーマなのです。

モウソシ地は、1960年代初頭から日本の研究者らによる砂漠植物研究の拠点。各大学の研究は教授から若い研究者へ、研究者の卵である学生へと引き継がれています。それは日本の先達研究者と内モンゴル農業大学の教授らとの数十年にわたる交友と研究の歴史の賜物。和歌山大学の研究者や学生も毎年この調査研究に参加しています。

砂漠に挑戦

調査はおもしろい!

広大な沙地にへばりつくようにシュウハク(臭柏)群落下の土掘りをしてるのは学生たち。シュウハクは、乾燥地で這うように根を伸ばし群落を拡大し、砂丘を密に覆い砂を固定する砂漠緑化の有力な植物。しかし人工的な播種や挿し木では強い苗の生産が困難など、生理生態には不明なところがあるようです。

今回、和大学生らを取り組んだのはシュウハクの土の中の根の広がりを見

覚化し、根茎の発生形態にアプローチしようというもの。

スコップで土と格闘し、現れたのは地表面に並行に横に何層にも広がる根のほふく形状でした。指導した教授はそのことから有力な仮説を得たようですが、専門外の筆者にもシュウハクが流動する砂に適応して何十年も根を張り生き延びてきた姿がわかるようでした。学生たちは地下の根茎

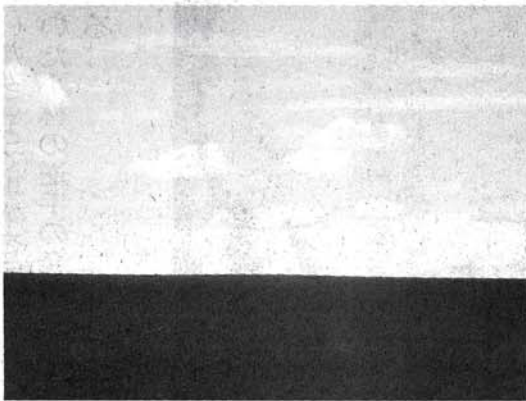
の姿を三次元で再生しようと、根茎の曲がりや太さ、高さ、広がりを見計測。計測点は300以上にもなっていました。根気のいる計測作業は何日もかかり、地平線に夕日が沈む頃、宿舎へと徒歩で砂漠を越えながら1人が叫びました。「調査っておもしろい、早く明日にならないかな」。

学部生にとって砂漠植物の生態という未知の領域に挑戦したことは、研究者の卵として興奮する出会いです。一方、砂漠緑化は、自然科学の探究のみでは成立せず、人々の暮らしや生業、経済との関わりが重要です。そこで筆者は人文社会科学の研究者

シュウハクの根茎を掘り出す



の立場から、学生を連れて牧民の生活調査を並行して実施。学生らは自然とともに暮らす人々の生活の一端を調べ、自家製チーズや肉のモチベーションを感じていました。日本への帰路、学生は「家に帰ったら水道水をぐびぐび飲みたい」と言っていました。おいしい水道水が豊富に飲める国、おいしいチーズが食べられる国、世界のさまざまな現実、それぞれの平和な持続性のために数多くの地道な研究があること、そしてその面白さを知った夏だったようです。



モウソシ地

科学の研究者

湯崎真梨子 (ゆざき まりこ)

和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授

専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。

プロフィール

